

# STYLING

## MONO

ニッパーの前身ともいえる「喰切り」の製造から始まった諏訪田製作所。従来の直線的なハンドル部ではなく指の形に沿ってカーブを持たせたデザインが特徴的だった。まさに現代のエルゴノミクス・デザインである。瓢箪に似た形から「祝瓢」という刻印が打たれた。



### VOL.57 SUWADA SINCE 1925~

●【諏訪田製作所】

Photo / Tomoaki Tsuruda (WPP)

Text / Teruhiko Doi (WPP)



古くから野鍛冶の土地として知られていた新潟県三条市。近隣に鉄や銅の産地があり、米農家の副業として鍛冶が栄えた。北前船に乗って西から材料が上って来て、街中を流れる五十嵐川が交易の中心となった。材料を加工するための燃料にも恵まれた土地であり古くからこの地は金属加工の集積地となって栄えたのである。大正15年(1925年)新潟県三条町で開業した「諏訪田製作所」は、喰切りを製造するブランドとしてスタート。日本のモノ作りが世界で高い評価を得るのは、たゆまぬ企業努力と職人的な人材のおかげである。金物の町として栄えた三条には鍛冶屋が軒を並べ、腕のいい職人たちがその技を競い合うような風土が根差していた。まさに日本的なモノ作りの原風景がそこにあったのである。諏訪田製作所創業者である小林祝三郎もそんな職人気質からニッパーの前身である「喰切り」に目をつけて製作を開始。「どうせ作るなら他人と違うものをもっと使いやすい道具を作りたい」世界に冠たる最高級爪切りは、そんな一途なモノ作りからやがて生み出されることになる。

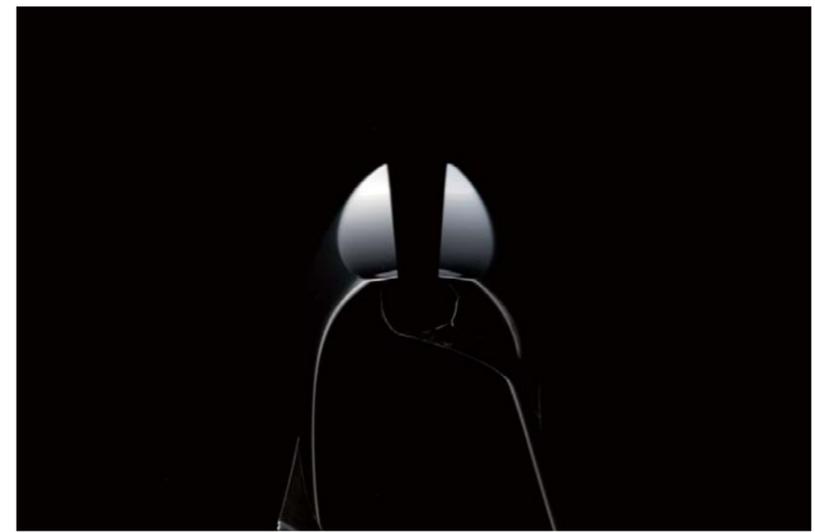
# STYLING

## MONO

戦後の混乱も落ち着いた昭和25年に  
 同社は「瓢箪型爪切り」を開発した。  
 数年前にこの当時の初期モデルを  
 復刻したデザインの製品が発表されたが、  
 残念ながら現在は発売されていない。  
 同社ショールームに行けば  
 展示品を見ることはできる。



◀世界最高の爪切りをご存知か？  
 ご存知なければ今日からこれが  
 その名にふさわしい名品だと  
 認識していただきたい。  
 シンプルなフォルムの中に  
 息づく職人技の極致。



金属加工における最高級の  
 傑作に数えられるこの爪切りは  
 大量生産品では絶対に出せない  
 流麗なカーブと、惚れ惚れする  
 ほどの切れ味を持っている。  
 一度使えば虜になる魔法がかかる。



## MONO



小林麒一の時代に作られた黒いボディの爪切りは、それまでのニッケルメッキを施した喰切りの切れ味をさらに追及して誕生。「これでいいと思ったら職人ではない」という意識を持って「もっといいモノを」と職人たちがこだわりこらわって完成した。こうした社風は21世紀の現在も残っている。



成形された材料を各部分ごとに専門の職人が丹念に仕上げる。iPodで音楽を聴きながら作業をするのは、創業者小林祝三郎の次男、小林英夫氏。80を過ぎても現役の職人だ。



右:職人たちが使う棒やすり。繊細な番手の違いを使い分ける。左:鍛造から上がってきた爪切り。同社工場では同じ仕事の連続で緊張感を無くさないように、定期的に作業現場が入れ替わる。



諏訪田製作所3代目小林知行社長。もはや世界ブランドとなったSUWADAを広めるために世界中を駆け回っている。

製作所」を設立。飽くなき追求心は代が変わっても衰えず、そのクオリティはますます磨きがかかり、やがて他の追随を許さぬ存在にまで成長する。

特筆すべきは、それまでの板バネを排してシリンドラーバネを採用したこと、さらに耐久性が高まった点。極限まで磨き上げられたミラー仕上げでも有名になった。平成に入るとネイリスト用の繊細なニッパが、プロのメイクアップアーティストたちの間で大変な評判となり、多くの人が「諏訪田製作所の爪切り」を知ることとなった。現在は誰もが認める世界最高の逸品として、有名金物店や国内外の一流セレクトショップなどでも取り扱われている。



昭和の鍛造工場が多用されていたスプリングハンマーは、いまはもうほとんどどの工場から消えているが、諏訪田製作所ではそのクオリティ維持と鍛造の自由度を守るため欠かさない存在として現役で活躍中。タンタンの工場という昭和の工場の音が、いまも同社内に響く。(写真は巨大なフレクションプレス機)

### 機械だけでは表現できない職人技が最高の爪切りを生む

大正15年(1925年)、三条の町でニッパの前身である工具「喰切り」の製造を始めた小林祝三郎は、職人だらけのこの地で抜きん出たモノ作りを行うには何か特徴が必要

だそう。職人の定義を伝統産業だけに限定したデータなのかどうかは不明だが、いずれにしてもモノ作りの気風が溢れる土地であることは間違いない。江戸時代から米作の農閑期に、道具を修理・製造する野鍛冶が多かった歴史がある。明治・大正の頃には三条の街中には多くの鍛冶屋が軒を連ねていたという。



原材料となる鋼材は通称「丸棒」と呼ばれる。キューティクル用のネイリストニッパには世界一高価な鋼材が使用される。



真っ赤に加熱された鋼材が丹念に成形される。機械と職人たちの手が、絶妙なバランスで融合。通常の工場ではあり得ないほどの圧力をかけた鋼材の、真ん中の部分のみが製品となる。なんという贅沢。



昭和50年代以降に大ヒットしたブラック仕上げ。現在も当時の愛着があるファンのために特注品として製造。「爪切りブラック」。サイズはSとL

要だと考えた。彼は「どうせ作るなら他人と違うものを、もっと使いやすい道具を作りたい」と考え、道具を使う人がもっと使いやすいようにと、喰切りのハンドル部分にカーブを持たせるデザインを考案。他の職人が作る喰切りはハンドルがストレートのものばかりだったのに対し、祝三郎の製品は「取っ手が指に馴染んで使いやすい」と評判になった。

迎え、世の中が落ち着き始めた昭和25年、職人の手による火造りの喰切りは量産品の安価なニッパに押され、市場規模は減少の一途だった。そこで祝三郎はそれまでの技術を活かして爪切りの製造を開始する。喰切りのときと同じように使いやすいさを追求し、よく切れる爪切りとして愛用者が増えていった。

昭和49年には祝三郎の長男麒一が家督を継いで「諏訪田

真横からこの爪切りを見ると、その工作精度の高さがよく判る。機械だけでは決して出せない芸術的カーブを見よ。

# STYLING

**MONO**

諏訪田製作所の製品に関する  
お問い合わせは  
☎0256-45-6111  
<http://www.suwada.co.jp/>



諏訪田製作所本社&工場。  
工場はオープンファクトリー  
になっており、見学は自由。  
+同社を直接海外ブランド  
に成長させた三代目社長の  
小林知行氏。



オープンファクトリーは開かれた工場。毎週火曜日～土曜日の10:10～17:00で工場内の見学が誰でも可能(注:途中休憩時間あり)。ギャラリーには過去の製品展示から、鍛造で出た余剰鋼材(スクラップ)を使ったオブジェなど、見所満載。



要望があればオーダーで作ってもらえるダマスカス鋼を使った逸品。受注品なので、完成までには時間がかかる。ダマスカス鍛造のレベルは同業者も唸るほどの出来栄えだという。価格6万3000円



ミラー仕上げのクラシックな爪切り。職人による丹念な1本1本の仕上げは見事。サイズはSとLの2サイズ。お値段はそれぞれ1万5750円。一生モノだ。永久修理対応。

多くの有名ネイリストやメイクアップアーティストたちを感嘆させた、プロ用の甘皮切り。その完成度の高さ、使いやすさ、美しさは世界で絶賛された。価格2万1000円～



右:昭和25年に誕生した喰切りスタイルの瓢箪型爪切りの複製品。(展示品)  
左:SUWADA爪切り「百年物語」仕様。ブラックステンレス。価格8925円。